

協働の共振や不協和の折り重なりから、 共存のエコロジーを問う

プロジェクト「宇宙の卵」は、美術家、作曲家、人類学者、建築家という分野の異なる4名の表現者を中心とした協働から成る。それは、私たちがどのような場所で、どのように生きることができるのかを思考し、人間と非人間が共存するエコロジーを想像するためのプラットフォームを築く試みである。そして、異質な表現の混交と共存を模索する芸術実践からなる展覧会を、共存のエコロジーについて思考を巡らす場へとひらきたいと考えている。

日本列島は自然災害の多発地帯で、2011年の東日本大震災では大津波による原発の大破という、近代化の歪みを経験した。21世紀に入り、人間活動の爆発的な増大がもたらす新たな地質時代「人新世」の到来に関する議論は活発化しているが、依然としてグローバルな企業活動に象徴される資本主義が地球を覆っている。このなかで、地球という惑星の薄皮程度の地表面に暮らす人間が、地球環境に甚大な影響を与えていることを、いかに考えるべきだろうか。

本プロジェクトは、美術家・下道基行が沖縄の宮古列島や八重山諸島で出会い、数年来撮影を重ねてきた《津波石》を起点とする。「津波石」とは、津波によって海底から地上へと動かされた巨石である。人々の生活のすぐ傍にありながら、植物が繁茂したり、渡り鳥のコロニーになったり、そのものが人間と非人間が共存するエコロジーのプラットフォームと言える。

作曲家・安野太郎の、人間の呼吸不在でリコーダーを自動演奏させる《ゾンビ音楽》は、鳥のさえずりのようにも聞こえる音楽である。これを発展させた《COMPOSITION FOR COSMO-EGGS “Singing Bird Generator”》は、日本館のピロティから展示室まで突き抜ける巨大なバルーンが、リコーダーへ空気を供給する肺の機能を果たすことで、生成される。その音楽は、《津波石》の映像とともに会場空間を満たす。

「宇宙の卵」というタイトルは、世界各地に伝わる卵生神話に由来する。石も卵も、球体という循環や周期を比喩的に表す形状をもち、卵の脆さは生成と破壊の両義的な関係を示している。神話研究を専門とする人類学者・石倉敏明は、沖縄や台湾を中心にアジア各地に伝わる津波神話を参照し、人間と非人間の関係を再考する新たな神話を創作した。

展覧会の会場となる吉阪隆正設計の日本館は、正方形平面の中央の屋根に天窓、床に穴が穿たれている。その周囲には4本の柱が螺旋状に配されており、ル・コルビュジエが提起した「無限成長美術館」を想起させる。建築家・能作文徳は、この建築を読み解いたうえで、異分野の作品群を繋ぐとともに、それらと建築空間との応答関係を築き、統合的な空間体験へとひらいた。

《津波石》の映像は1点ずつ独自の時間でループし、《COMPOSITION FOR COSMO-EGGS “Singing Bird Generator”》は自動生成により常に変化する。複数の場所に多様な共存の物語が刻まれるこの空間では、同じ瞬間が再び訪れることはなく、観客は自身の身体を通じて、映像・音楽・言葉が新たな出会いを重ねる瞬間の連続を体験する。

映像と音楽が驚くほど共鳴する刹那に出会うこともあれば、空間全体が共振するような時間もあるだろう。逆に、すべてが不協和音を奏でるように、個がせめぎあう瞬間に遭遇することもあるはずだ。調和や融合のみではなく、ときに激しい衝突にも見舞われる。

「津波石」が共生・共存のエコロジーそのものであるように、異なった能力をもつ表現者による異質な創作物は、異質なまま重なりあう。本展は、このような、単純な共鳴や共振にはとどまらない生成変化を続ける場をひらく「協働」を通じて、本質的な共生・共存のエコロジーを問うものである。

服部浩之